

<研究ノート>

国際別科の始動と運営 1年間の日本語集中学習プログラム

亀田 千里*・金久保紀子**

A Report about One-Year Intensive Japanese Language Program on the International Extension Program for Languages and Culture

KAMEDA Chisato* and KANAKUBO Noriko**

1. はじめに

筑波学院大学では、2010年4月に外国人に対する日本語および日本事情の指導を目的とした別科を設立した。日本語だけに内容を限定しない、という趣旨から名称を「国際別科」とし、2009年冬から学生募集を開始した。

本学は筑波女子大学の時代から、日本語教師の養成を専門科目の中で行ってきた。その関係で、地域の外国人の日本語教育の支援には関わりが深く、学内でもボランティアでの日本語学習の機会を提供している。また、2010年当時、茨城の県南地域には、一般の学習者を対象とした日本語を集中的に学習する教育機関は存在していなかった。

このような背景があったことから、本学に1年間の日本語集中学習の教育機関を設置し、地域からのニーズに応えると同時に、本学の留学生教育にも寄与することを考えた。そこで、国際別科は、日本語初級後半以上の学習者を対象とし、日本での仕事を含めた生

活の基盤となるような日本語力を身につけることを目標とすることとした。

国際別科には当面、専任教員はおかず、情報コミュニケーション学部および経営情報学部に所属している日本語教育の専任教員2名が運営の統括をすることとした。また、別科委員会を設置し、国際別科の学生募集・広報・教学について審議・検討することとした。実際の授業の多くは、非常勤講師が担当することとした。

国際別科の学生募集の要件は以下の通りである。

1. 募集人員 50名
2. 修業期間 1年（4月入学・9月入学）
3. 出願資格 次の全ての条件を満たす者
 - (1) 自分の国の大学入学資格をもっている者
 - (2) 筑波学院大学国際別科に入学する時、18歳に達している者
 - (3) 日本語能力試験(JLPT)3級または、

* 経営情報学部経営情報学科、Tsukuba Gakuin University

** 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

N4以上の合格者、または出願する時に300時間以上、日本語を学習したことがある者 または同等の能力を持っていると大学が認めた者

(4) 日本在住の身元保証人がいる者

2. 学生数および国籍など

国際別科では、正規学生と同時に、科目等履修生の募集も行っている。表1は、2010年春学期から2011年秋学期に至るまでの入学者数および国籍別内訳を、学期ごとにまとめたものである。これまで様々な国籍の学生が入学している。

また、これまでの在籍者が所有する在留資格の内訳は、表2の通りである。

表1 入学者数および国籍

学期	正規学生		科目等履修生	
	人数	国籍	人数	国籍
2010年春学期	4	中国、韓国	2	中国、アメリカ
2010年秋学期	3	フィリピン、韓国、中国	1	フィリピン
2011年春学期	3	中国、メキシコ、シンガポール	2	中国
2011年秋学期	4	イギリス、モンゴル、台湾、中国	6	中国、インドネシア、アメリカ

表2 在留資格の内訳

在留資格	正規学生	科目等履修生
留学	3	2
文化活動	1	0
研究	0	1
家族滞在	2	2
日本人の配偶者等	7	2
定住者	1	0
永住者	0	4

表2から、学生の在留資格が多岐に渡っているということが分かる。特に、「日本人の配偶者等」や「永住者」など、日本に生活の基盤をすでに持っている学生や、今後も日本で長く生活する可能性がある学生が圧倒的に多いことが特徴である。

3. スケジュールとカリキュラム

国際別科は、別科だけの授業と学部の授業をバランスよく組み合わせることで、特色を出すことをねらった。また、1年間のスケジュールも、学部と合わせた。

<年間のスケジュール>

4月：4月入学生入学式 オリエンテーション レベルチェックテスト
 4月～7月：春学期 授業および小テスト
 7月下旬～8月上旬：学期末テストおよびフィードバック
 8月：9月入学生修了式
 9月下旬：9月入学生入学式 オリエンテーション レベルチェックテスト
 9月～1月：秋学期 授業および小テスト
 11月：留学生研修旅行
 1月下旬～：学期末テストおよびフィードバック
 3月：4月入学生修了式

<カリキュラム>

国際別科の目標を達成するため、カリキュラム作成においても、中級以上の日本語力を4技能にわたってバランスよく伸ばせるように構成した。

また、大学のひとつのプログラムとして、日本語を使って新しい教養を身につけるために、日本の社会や文化などに関する教養的な授業も、学部生に交じって受講できるようなシステムとした¹⁾。さらに、本学の教育目標である「社会力¹⁾の育成」を意識し、国際別

科の学生にも地域社会での社会参加活動ができるような体制を整えた。

また、国際別科の一つの特色として、日本語を学習すると同時に、外国語としての英語を学習したい学生のために、英語を学べるようにも工夫した。中国などの留学生の中には、日本語を第一外国語としているケースもあるため、学部に関連されているいくつかのレベルの英語の授業を柔軟に履修できるようにした。

国際別科発足当初の2010年度春学期のカリキュラムでは、日本語関係の各科目を通年で設定したが、その後、成績評価の仕方や、科

目等履修生の受講しやすさに配慮するため、半期ごとの単位に改めた。

4. 授業内容の紹介

以下では、国際別科の日本語科目および現代日本事情科目の2011年度春学期までの内容を、1週あたりの時間数の多い順に紹介する。

1) 日本語 C [文型] (週3時間)

●2010年度春学期

中級前半レベルの教科書を使用し、初級で習う基礎的な文法項目を確実に使えるように

表3 2011年度秋学期 国際別科のカリキュラム

科目区分	授業科目の名称	科目数	単位数			備考
			必修	選択	自由	
日本語	日本語 A1 (語彙・漢字)	1	1			1科目1単位で考える
	日本語 A2 (語彙・漢字)	1	1			
	日本語 B1 (読解)	2	2			
	日本語 B1 (読解)	2	2			
	日本語 C1 (文型)	3	3			
	日本語 C2 (文型)	3	3			
	日本語 D1 (会話)	2	2			
	日本語 D2 (会話)	2	2			
	日本語 E1 (作文)	1	1			
	日本語 E2 (作文)	1	1			
	日本語 F1 (聴解)	1	1			
	日本語 F2 (聴解)	1	1			
	小計	20	20			
現代日本事情	日本の社会	1		2		どちらか選択
	日本の文化	1		2		
	社会参加活動	1	1			
	小計	2	1	2		
教養	人文科学科目	1		2		2単位以上選択
	社会科学科目	1		2		
	自然科学科目	1		2		
	学際科目	1		2		
	茶道	1		2		
	華道	1		2		
	スポーツ	1		2		
	小計	1		2		
英語	英語 A	2		2		自由選択
	英語 B	2		2		

なることを目指して授業を行った。使用教科書のレベルに比べ、学習者の日本語のレベルの方が高かった。

●2010年度秋学期

秋入学の新生が加わったため、入学時期とレベルチェックテストの結果を考慮しつつグループ1（上レベル）、グループ2（下レベル）の2つのレベルのクラスを設けた。

<グループ1>

受講生に日本語能力試験受験者が多かったため、12月上旬までは能力試験を視野に入れた授業を行った。能力試験対策用の教科書を使用し、文法項目の確認とドリルを中心に授業を進めた。前学期に比べ内容がずっと難しくなったが、学生は試験合格という明確な目標を持っていたため、こつこつと問題に取り組んでいた。

試験終了後は、文型練習から離れ、新聞記事などをもとに、日本の社会事情を読み取り、自分の意見を述べたり自分の国の事情を紹介したりする活動を行った。

能力試験対策に力を入れた授業は、学生の要望にも合っており、学生の日本語力を伸ばすことに貢献した。また、試験終了後に行った授業では、様々な興味深いテーマについて、学生が自分の日本語力を存分に発揮して自分の調べたことや考えたことをまとめるという活動ができ、有益だった。

<グループ2>

春学期と同様、初級の文法項目の整理を目的とした授業を行った。教科書も同じものを使用したが、教科書に挙げられていた文法項目を初めて習うという学生が多かったため、文型の導入やパターン練習に多くの時間を費やすことになった。また、非漢字圏の学習者が多かったこともあり、教科書に出てくる漢字の理解にも時間がかかった。その結果、文法形式の意味や形など、形式的なことは理解できるようになったが、それを学習者自身が消化し運用に繋げていけるような練習まで行

うことができなかった。

●2011年度春学期

今学期はグループ1、グループ2ともに文型中心の教科書ではなく総合教科書を使いながら授業を行った。そのことにより、聞き取りや文章読解、作文など、様々な側面からバランスよく文型の学習を進めることができた。学習項目も進度も、各グループの学生のレベルに合っていた。

また、両グループともこの授業で毎回漢字クイズを実施し、漢字の練習にも取り組むことにした。特にこの学期の学生たちは非漢字圏が多かったため、漢字の勉強を継続して行うよい機会になった。

2) 日本語B [読解] (週2時間) および日本語E [作文] (週1時間)

●2010年度春学期

読解と作文の授業内容を連動させ、1冊の教科書（中級前半レベル）を週3時間使って授業を進めた。読解の授業ではグラフや文章の読み、文法確認などを扱い、作文の授業では読んだ文章の内容をもとに自分の経験や考えをまとめ作文を書く練習を行った。教科書の内容は学期の途中で終えたため、その後は新たに文章を用意し、教科書の構成に準じた進め方で授業を行った。

なお、週2時間の読解の授業のうち1時間は、学部の1年生の日本語授業との合同開講だった。

●2010年秋学期

<グループ1>

グループ1は、教科書を使わず、教師が用意した文章をもとに授業を行った。別科生だけの読解の授業は作文の授業と内容を連動させ、日本語に親しむことを目的としてエッセイや新聞記事など多様な種類の文章を使いながら、語彙の確認や文脈理解、作文などを行った。一方、学部生との合同授業では、グラフや数値の入った文章を使い、データの読み取

りを中心とした読解練習を行った。

<グループ2>

グループ2は、グループ1と異なり、読解と作文の授業の内容を連動させなかった。これは、グループ2の学生のレベルを考慮し、作文の授業ではより基礎的な内容を扱った方がよいと判断したためである。読解の授業では春学期と同じ教科書を使って授業を進め、文章の読みや文法確認、本文に関連した作文などを行った。そして学期の終わりには、授業で書きためた作文を清書し、文集としてまとめた。

非漢字圏の学生が多かったこともあってか、春学期と同じ教科書を使っていたにも関わらず、読解にも作文にも時間がかかったため、全体的に春学期よりもゆっくりとしたペースで授業が進んだ。

一方、作文の授業では、教科書（初級レベル）を使用し、書き言葉の使い方や文章の構成など基礎的な項目を扱った。割合流ちょうに話すことができる学生でも、書かせてみると不正確な場合が多かったため、教科書を使用しポイントを押さえながら作文の指導をしたのは適切だったと思われる。

●2011年春学期

読解の授業は、週2時間のうち1時間は前学期同様2つのグループに分かれての授業、1時間は全員一斉の授業を行った。

作文の授業は全員一斉に実施した。読解の授業と内容と連動させ、読解の授業で読んだ文章に関連した作文を作文の授業時間に書く、というスタイルをとった。

<読解：グループ別>

グループ1は、前学期にグループ2で使用した教科書の続編にあたる教科書（中級後半レベル）を使用して授業を行った。前学期使用した教科書と今学期使用した教科書の構成が同じであったことから、学生にとっても授業が受けやすかったようである。ただし、内容は学生の日本語力に比して難しく、中には

授業についていくのがやや困難な学生もいた。

グループ2は、前学期と同じ教科書を使用して授業を進めた。履修生によっては内容がやや難しかった。

どちらのグループも、学部生と合同ではなく別科生だけの授業であったため、授業は進めやすかったが、グループ別の授業が週2時間から1時間に減ったため、教科書の内容がなかなか消化しきれなかった。特に、グラフやデータの読み取りにかかる時間がとれなかったため、結果として、総合教科書を使って進めた文型の授業の内容とあまり差がなくなってしまう。

<読解：一斉>

グループ別の授業と同じ教科書を使い、文法項目の個別確認や本文の音読練習を行った。アシスタント（日本人学生）をつけて個別に活動に取り組んだため、履修生の集中力は高かったように思われる。特に、テープへの録音および再生しながらの自己チェックを行った音読練習は効果的で、学生自身の発音に対する意識を高めることができた。

<作文>

読解の授業で扱った内容をもとに各自が作文メモ（何をどのような順番で書くかまとめたもの）を作成し、それを使って作文の授業時間内に作文を書いた。作文メモの作成は、読解および作文の授業時間の両方を使って行った。履修生は既婚者が多く家庭で宿題を行う時間がとれない学生が多かったため、授業の中で作文を書くというこのスタイルは好評であった。また、前学期とは異なり、学期末に文集を作成することを授業の初日に告知したため、学生は目標を持って活動に取り組むことができたようである。

3) 日本語D [会話] (週2時間)

週2時間ある授業（以下「クラス①」「クラス②」）は、独立した内容で実施した。

●2010年春学期

<クラス①>

聴解・会話指導用の教科書（中級レベル）を使用し、聴解の授業と連動しながら、授業を行った。

<クラス②>

市販の教材は利用せず、内容に合わせてレジメを利用しながら授業を進めた。学部の1年生の日本語授業と合同で実施し、多様な学生との日本語でのコミュニケーションができるようにした。内容としては、自己紹介、お気に入りの場所紹介、お国検定問題作り、インタビュー等を実施し、自分の日本語を録音・録画してモニターする力、日本語で説明する力の育成を目指した。

●2010年秋学期

<クラス①>

グループ1では、プロジェクトワークとしてブログの作成に取り組んだ。毎時間テーマを決めて、司会と書記を立て、会議形式で進行をした。

グループ2では、場面に応じた話し方ができるようにすることを目標とした。学期の前半は、春学期と同じ教科書を用いて、聴解の授業と連動させながら授業を実施した。後半は教科書から離れ、旅行計画など実践的な活動に移った。

<クラス②>

グループ分けをせず、春学期と同様に学部の学生と合同で授業を行った。前半は、大学の学園祭に主体的に参加することを目標として、出身の国に関する紹介の展示物作成を通して、話し合っまとめる作業に取り組んだ。後半は、防災をテーマに、防災ラジオドラマコンテストに参加するため、防災に関して話し合ったり、簡単なドラマを考えたりする活動を行った。実際に、ラヂオつくば²⁾のスタジオで録音し、コンテストに応募することができた。

●2011年春学期

この学期は、クラス①もクラス②も、グループに分けず全員一斉に授業を行った。

<クラス①>

全学生にとって苦手である、敬語をとりあげた。トピックベースの教材を利用し、学生が敬語に親しめる内容とした。

多くの学生は、日本での生活が長く、普段比較的流暢に日本語で話すことができたのだが、敬語になると口が重くなった。また、そもそも教科書の問題を読み取る力が弱く、課題が正確に行えない学生もいた。

<クラス②>

学部の学生と合同で授業を行った。大きな目標として「説明」を取り上げ、大学生活内で遭遇する場面での説明に関する練習、録画、振り返りを実施した。

4) 日本語 F [聴解] (週1時間)

●2010年度春学期

聴解・会話指導用の教科書（中級前半レベル）を使用し、週2時間ある会話の授業のうちの1時間と内容を連動させて授業を行った。また、学習者の要望もあり、途中からは日本語能力試験対策の聴解練習も取り入れた。

●2010年度秋学期

<グループ1>

ドキュメンタリー番組のビデオを用いて、部分ごとに聞き取る活動や全体の内容を理解する活動を行った。現代社会に関わる内容を多く取り上げたが、話題によっては語彙不足などから内容が理解できなかつたり途中で聞き取りをあきらめてしまったりする学生も見受けられた。その一方で、学生によってはテレビの視聴に興味を持ち、実際の番組を視聴するようになった者もいた。

<グループ2>

前学期と同様、週2時間ある会話の授業のうちの1時間と共通の教科書を使って授業を

行った。日本人配偶者を持ち普段日本語を使いながら生活している学習者は、対面での会話には問題がないが、CDを用いての聴解活動は難しい様子だった。

●2011年度春学期

レベル別グループに分けず、全員一斉に授業を行った。学生の中には、1つ1つの聞き取りはできても、ポイントを絞って聞くのが苦手な者もいた。市販の聴解用教材とドキュメンタリー番組などの生教材を両方用いながら授業を進めた。早口言葉の聞き取りや歌なども取り上げた。

5) 日本語 A [語彙・漢字] (週1時間)

この科目は他の科目と異なり、どの学期においてもレベル分けをせず一斉授業を行った。

当初は「表記」というタイトルで始めたのだが、実際に教えている内容と科目名を合致させるため、2011年度からは「語彙・漢字」という科目名に変更した。

●2010年春学期 (「表記」として実施)

クラス内のレベル差が大きかったため、市販の教材を複数利用し、学習者がすでに持っている語彙力の差を埋めながら、理解を深めることに主眼をおいた授業を行った。特に、日本での生活が長い学習者とそうでない学習者には、既習(既知)語彙に差があった。

読みやすい字が書けない学習者もいたため、字形や、筆順にも触れ、漢字への慣れを促すような内容も扱った。

●2010年秋学期 (「表記」として実施)

多様なレベルの学習者に対応するため、学部で日本語教育について学んでいる日本人学生を授業アシスタントとして活用する授業スタイルをとった。

具体的には、日本人学生と別科生を少人数(2～3人)のグループに分け、目標としている日本語能力試験の級に合わせた教材を用いて、1課ずつ毎週進んだ。

少人数になったことで、学習者は質問がしやすい体制となり、リラックスして授業に臨むことができていた。また、春学期に引き続き、苦手な字形や漢字の構成について、学習者のペースで授業を進めることが可能となっていた。

●2011年春学期 (「語彙・漢字」として実施)

語彙については、基本的な語彙の運用能力を伸ばすことを目指した。また、漢字については、学生が漢字の構成や筆順を意識して読み書きができるようになることを目標とした。

教科書は、前年度春学期に使用した語彙の教科書を用いた。また、漢字の指導にあたっては、教科書に出てきた漢字について、副教材を使いながら授業を行った。

教科書のレベルは学生に合っており、授業で扱った内容はある程度学生に定着したと思われる。

6) 現代事情科目

●「日本の社会」「日本の文化」

2010年度は「日本の社会」および「日本の文化」を学部の授業との合同開講という形で設けたが、2011年度は別科生を対象に「日本の社会」のみを開講し(春学期)、日本の地理や歴史、現代文化など幅広い内容を扱った。授業内容に関連し都内での学外研修も実施した。また、学生の体験や考えを日本語で発信する場としてブログを利用し、学生が書いた記事を定期的に掲載した。

2011年度から別科生のみ対象の授業としたことで、学生の日本語力や日本に関する知識量に合わせた内容を準備することができた。日本語力の向上を目指した授業に比べ、学生はややリラックスして授業に臨んでいたようである。

●社会参加活動

2010年度は、本学の学部1年生が行っている体験型の社会参加活動に準じ、別科生も学外団体での社会参加活動を行った(秋学

期)。社会力コーディネーター³⁾の協力のもと、野外作業や学童保育の補助など、各自の日本語力に合った活動をすることができた。

学生の多くは普段限られた人間関係の中でしか日本語を使っていないため、学外の団体の中で日本語を使って活動したことは大きな刺激となった。また、年度末に行われた1年生の全体報告会で別科の代表者2名が発表を行った。原稿を作り、多くの聴衆を前にして日本語で発表したことは、別科生にとって大きな自信につながったようである。

2011年度は、社会参加活動への理解がより深まるよう、前年度の内容に加えて地域の市民活動の紹介なども行う予定である。

5. 今後に向けて

5. 1 プログラムの成果

国際別科のプログラムを1年半運営したことを振り返る。

まず、学生の日本語力の伸びを単純に測る尺度の一つである日本語能力試験の結果を見ると、2010年春学期までに在籍した正規生のうちで、N1合格者2名、N2合格者3名、N3合格者1名であった。漢字圏出身の学生が1年足らずでN1に合格したことに加え、非漢字圏の学生がN2に合格できたことは、大きな成果であったと考える。

また、国際別科の日本語プログラムの内容にインドネシアの日本語教育機関（Japanese Course Yogyakarta ジャパニーズコース ジョグジャカルタ）が注目し、積極的に評価した結果、国際別科との間に交流協定を結ぶに至った。今後は、交流協定に基づき、本学の国際別科への入学を目指すインドネシアからの学生が増えることが期待できる。さらに、インドネシアで日本語を学んでいる高校生らを対象にした日本語短期研修を実施することとした。現地日本語教員の研修の機会も同時に提供できるので、インドネシアの日本語教

育に対する一種の支援ができるようになる。

また、日本語の指導は、各学期4名の非常勤講師が担当した。非常勤講師および専任教員は、ミーティングやメールの連絡などで、学生の日本語学習の進捗状況を頻繁に確認し、学生にあった指導を行う上でのスムーズな連携をとることができた。

5. 2 今後の改善

実際に国際別科を運営してみると、生活基盤が日本にすでにある外国人が本学に入学してくるケースが予想以上に多かった。一方、海外から直接本学に入学を希望する学生は、入国管理局から在留資格認定証明書がなかなか得られないケースもあり、今後は海外での学生募集が円滑に進むような手だてを考える必要がある。そのため、インドネシアの日本語教育機関や、本学の法人の北京事務所との連携をさらに強化する方向である。海外からの短期研修を受け入れることを通して、つくば市や本学への親しみを持ってもらうことも大切であろう。

生活基盤が日本にすでにある外国人の場合、学習の主眼を日本語のみに置いている傾向が強い。したがって、国際別科の特徴である日本語以外の科目が履修できる体制が、必ずしもメリットとして受け取られないこともあった。カリキュラムの改編を柔軟に実施し、多様な学生に合った履修ができるように工夫したい。

さらに、教員側が想定した以上に学生の日本語力にばらつきがみられ、学期のスタート時に集中的な個別指導を行った事例もあった。これを踏まえ、今後も柔軟な対応ができる体制を整える必要がある。

また、科目等履修生もコンスタントに国際別科に入ってくる状況が確認できた。外国人居住者が多いつくばという地域の特徴もあり、今後も日本語ボランティア教室とは異なる教育内容に興味を持つ学習者は多いと考え

る。そのような学習者にとっても、継続して学習が可能な体制作りも重要である。さらに、潜在的な科目等履修生予備軍にどのように広報活動を展開するか、も課題となっている。本学にとっての経営を考えた時、国際別科から学部への進学を増やす方策も必要である。国際別科で1年、学部で4年、計5年という長期にわたる留学のビジョンをどのようにアピールすればよいのだろうか。

国際別科は、少しずつではあるが、地域での認知度もあがり、茨城県県南のつくば市に必要な日本語教育機関となりつつある。今後

も、担当教員間での密な連携と、学習者への対応を重要視しつつ、科目等履修生、正規学生、学部への進学希望者といった多様な学生のニーズへの対応が可能な体制づくりが急がれる。

注

- 1) 社会力については本学 HP 参照。
- 2) ラヂオつくばは、つくば市内にあるミニ FM 放送局。
- 3) 社会力コーディネーターは、本学のスタッフで、社会参加活動全体を統括する役割を担っている。

付記

1. 使用教科書一覧（教科書を使用した授業のみ）

2010年度春学期

科目	教科書	備考
日本語 A [表記]	初級から中級への日本語ドリル 語彙 (The Japan Times)	
	語彙力ぐんぐん 1日10分—中上級レベル日本語教材 (スリーエーネットワーク)	
日本語 B [読解] 日本語 E [作文]	改訂版 トピックによる日本語総合演習 中級前期 (スリーエーネットワーク)	
日本語 C [文法]	短期集中 初級日本語文法総まとめポイント20 (スリーエーネットワーク)	
日本語 D [会話] 日本語 F [聴解]	聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編 (くろしお出版)	会話 2 コマのうち 1 コマでのみ使用

2010年度秋学期

科目	グループ	教科書	備考
日本語 A [表記]	1	日本語能力試験 20日で合格 N1文字・語彙・文法 (国書刊行会)	
	2	「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N3語彙 (アスク)	
日本語 B [読解]	2	改訂版 トピックによる日本語総合演習 中級前期 (スリーエーネットワーク)	
日本語 C [文型]	1	「日本語能力試験」対策 日本語総まとめ N1文法 (アスク)	
	2	短期集中 初級日本語文法総まとめポイント20 (スリーエーネットワーク)	
日本語 D [会話] 日本語 F [聴解]	2	聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編1 (くろしお出版)	会話 2 コマのうち 1 コマでのみ使用
日本語 E [作文]	2	みんなの日本語初級 やさしい作文 (スリーエーネットワーク)	

2011年度春学期・秋学期

科目	グループ	教科書	備考
日本語 A [語彙・漢字]	(合同)	初級から中級への日本語ドリル 語彙 (The Japan Times)	
日本語 B [読解]	1	改訂版 トピックによる日本語総合演習 中級後期 (スリーエーネットワーク)	
日本語 E [作文]	2	改訂版 トピックによる日本語総合演習 中級前期 (スリーエーネットワーク)	
日本語 C [文法]	1	中級を学ぼう 中級中期 (スリーエーネットワーク)	
	2	中級を学ぼう 中級前期 (スリーエーネットワーク)	
日本語 D [会話]	(合同)	日本語敬語トレーニング (アスク)	会話 2 コマのうち 1 コマでのみ使用

2. 非常勤講師一覧

学期	担当者
2010年春学期	山崎由紀子 (日本語 A、日本語 F) 小野寺志津 (日本語 B、日本語 C、日本語 E)、馬場裕 (日本語 C、日本語 D)
2010年秋学期	山崎由紀子 (日本語 D、日本語 F) 小野寺志津 (日本語 B、日本語 C、日本語 E)、馬場裕 (日本語 C、日本語 D)、吉田麻子 (日本語 C、日本語 F)、関裕子 (日本語 C)
2011年春学期	山崎由紀子 (日本語 A、日本語 D) 小野寺志津 (日本語 B、日本語 C)、吉田麻子 (日本語 F)、関裕子 (日本語 B、日本語 C、日本語 E)
2011年秋学期	山崎由紀子 (日本語 A、日本語 D) 小野寺志津 (日本語 B、日本語 C)、吉田麻子 (日本語 F)、関裕子 (日本語 C、日本語 E)